

台風19号から早や一年 神ノ川のいま

令和元年10月12日に相模原市緑区を襲った台風19号による神ノ川林道の崩壊で、一年が過ぎた現在も依然林道は復旧の見込みがないままです。一日も早い回復を願うばかりです。現状は神ノ川ヒュッテに至る林道の一部が崩壊、一部は復旧が進行しているとの情報です。

(令和2年10月現在)

当センターが管理している折花神社講中も一部施設が破損しているため、令和3年春の北丹沢神ノ川流域の山開きは、折花神社施設の修繕工事を検討したいと思っております。具体的には看板の修理、鳥居のペンキ塗装を計画しています。講中は初代が神奈川県山岳連盟会長の故尾関弘氏、2代目が神奈川県山岳連盟理事長植木知司氏、3代目は北丹沢山岳センター理事長・神奈川県山岳連盟副会長の杉本憲昭氏が引き継いでいます。折花神社は再建より60年を経ています。



今から五年前 桜が満開の折花神社

神ノ川ヒュッテ これまでお世話になった方々

建築主・管理人	(故) 佐藤 盛次・子息
現在ヒュッテ代表	杉本 憲昭 (藤野町山岳協会会長)
管理人	(故) 山崎 弘武
〃	(故) 池崎 友行
〃	木全 広幸
〃	梶原 紘
〃	岸 百合子
〃	市川 博文 (サポート)

神ノ川ヒュッテの名物 五右衛門風呂の危機

神ノ川ヒュッテでご好評いただいている五右衛門風呂が、存亡の危機に瀕しています。以前からも風呂場の土台が川の水で浸食気味でしたが、昨年の台風による日陰沢の氾濫で濁流となった土砂が押し寄せた為、かなり危険な状態になってしまいました。現在はどうなっているのか、確認にも行けない状態です。



奥野幸道著 丹沢今昔より ～原小屋平メルヘン漂う山小屋～



雪をかぶった原小屋山荘 昭和39(1964)年2月

西丹沢・北丹沢

46 原小屋平 メルヘン漂う山小屋

ササのそよぐ美しい姫次(四三三メートル)と丹沢山塊の最高峰・蛭ヶ岳(一六七三メートル)との間に、原小屋平がある。昭和三十(一九五五)年の国民体育大会(国体)開催を控え、ここに山小屋が建設された。前年の十月に地鎮祭が行われ、神奈川県山岳連盟所屬の山男たちが無料奉仕で資材を担ぎ上げ、十一月五日に棟上式が行われた、と当時の新聞は伝えている。丹沢の津久井側稜線上では初の山小屋だった。稜線上の山小屋で一番問題となるのは水であるが、ここはその水が豊富で、神ノ川側の伊勢沢、早戸川側の原小屋沢と山小屋の両サイドに水場を持っていた。はじめは姫次に建設する案もあったというが、水が決め手となって、原小屋平が選ばれた。

カラマツに囲まれ、静かなメルヘン漂う山小屋だった。利用客は多くはなかったが、霧閉気にひかれて通う常連客は少なくなかったと思う。わたしもその一人で、正月には家族で寄らせてもらっていた。玄倉川周辺の開拓者で丹沢の主といわれていた坂本光雄さんに出会ったのも、この山小屋だった。静かな山小屋で楽しみの一つは、小屋番とのふれあいだ。初代の小屋番は中川昭義さんで、昭和三十五(一九六〇)年に蛭ヶ岳山頂に山荘が設置されると、蛭ヶ岳に移った。津久井町青根で鶴屋旅館を経営する湯川齊さんが二代目となり、その後、和久田安彦さん、石田輝子さんと交代していった。石田さんは原小屋山荘最後の小屋番となっただけに、思い出深い。京都出身で、二十代のときから塔ノ岳の尊仏山荘を手



現在の原小屋平。中央が山荘跡地。平成14(2002)年は異常な暖冬で、撮影した3月23日は積雪はなかった

伝い、原小屋山荘に移ってきた。当時の新聞の「丹沢」連載で「いつもカスリのモンベをはき、オカッパのような髪をしているもの静かな人。話をするとニコニコして丸みのある京言葉をやつる」と紹介されている。石田さんは小屋の常連だった吉良嘉直さんと結婚。石田さんが原小屋、吉良さんが蛭ヶ岳の山荘を守り、夫婦で登山者の世話をしたこともあった。忘れられない思い出がある。昭和三十九(一九六四)年の冬、蛭ヶ岳山荘を手伝っていた寺本武雄君と、蛭ヶ岳から原小屋山荘までスキーと輪カンで競争した。あまり上手でないのにスキーの腕前を披露したがる寺本君に対し、わたしは輪カンをはいた。輪カンの方が速かった。その年の夏、寺本君は日本屈指の岩壁である谷川岳一ノ倉沢衝立岩で宙吊りとなり、遭難死してしまつた。寺本君の追悼レリーフは、蛭ヶ岳から丹沢山に寄った稜線の鬼岩岩近くにある。表丹沢に比べ北丹沢は登山者の数がぐっと少ない。登山ブームが下火となったこともあり、採算面で厳しくなつた原小屋山荘は昭和五十六(一九八一)年、閉鎖解体された。今は小さな平地が山小屋の跡をしのばせるだけである。